

浮世繪草紙

特255

120

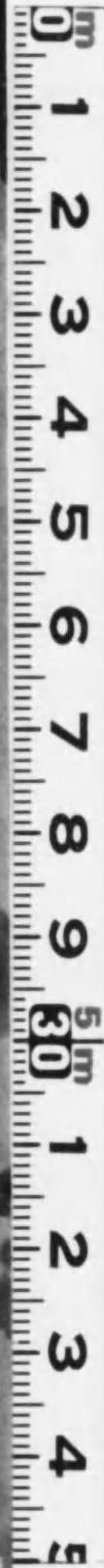


喜多川歌麿

鮑取

194

東京
泰江堂版



始



浮世繪は今や世界の寶となつて居る。歐米人の浮世繪禮讚の聲は、今改めて云ふ迄もないが、實に我浮世繪は郷土と民族性によつて、生み出された偉大なる民衆藝術である。歴史のページをくると長い間貴族富豪等の特殊階級のみが愛鑒した藝術も、彼の豊臣秀吉が尾張の名もなき百姓の俸より起つて天下を平定し、海外に迄勢威を揮つた、安土桃山時代に至つて、漸く解放されるゝと共に市井に平民文學を産み、民衆劇場を産み、美術も又漢畫の長い支配から脱して、初めて一般民衆との深い溝渠はのぞかれ、俄然として擡頭したのが實に我浮世繪である。そして江戸開府以後菱川師宣、奥村政信、勝川春章等の名手相次で起り、版畫に摺刷上に一大革新を齎らすと共に、泰平の股賑は一般民衆の富を増進し、その繪畫賞鑑力も進みて遂に世界に燦然たる光輝を放つ民衆藝術の精粹とも云ふべき我浮世繪は完成されたのである。云ふ迄もなく浮世繪と一概に呼んでも、岩佐又兵衛時代より幕末に到るまで、幾百幾十の畫家各その長所を異にし、或者は美人風俗に、俳優の似顔に、或は風景畫に、又葛飾北齋の如く往く處として可ならざるなき畫人もあつたが、各自その長所を異にして居る今其主なるものを擧ぐれば岩佐又兵衛、菱川師宣、懷月堂、奥村政信、東洲齋寫樂、西村重長、鳥居清信、鈴木春信、勝川春章、鳥居清長、喜多川歌麿、葛飾北齋、歌川豊國、溪齋英泉、歌川廣重、歌川國貞等がある。然し此のポトユラースクールとして、世界に冠絶する日本獨特の精巧細緻な味ひも、維新後邦人には忘れられて居るが先づ歐米人の推獎によつて世界的の聲價を得た事である。其爲め江戸三百年間の優秀なる版畫は、ほとんど海外に流出して今や國內に是を求むるも得る事が出来なくなつた、が近時松方氏の如き偉大なる鑑賞家の在るありて、此の國寶的繪畫の流出をなげき巨萬の價を以て海外に於ける有数の蒐集品を購ひ、再び我國に將來されたるを聞くは誠に私等の喜びに堪へぬ次第である、しかも今や國寶的に價値づけられるゝ結果とは云へ一枚の版畫にして實に三千圓以上上るものあるを見ても、是等の畫は獨り富豪の愛玩にまかすのみで、一般鑑賞者にとりては容易に入手する事の難きは、手折るべからざる高峰の花と云ふべきである。

本會深くこれを遺憾として古今浮世繪草紙と題して浮世繪中の珍品を選び、寫眞版にふして實費を以て弘く之れを同好の士に頒つ。

浮世繪愛好會



筆磨歌川多喜

供子と人美二前鏡



筆國豊川歌

人美の殿湯



装衣と夏田世々々々

松坂屋仕入のふかり向

奇磨子

筆磨歌川多喜

裳衣夏



筆信春木鈴

きやゝさ



筆章春川勝

水 行



筆貞國川歌

宿 旅



子時公の節
氏よりとらふ

新藤子章
岩

筆磨歌川多喜

ぎぬ肌



寝
ま
き
姿
美
人

勝川春章画

勝
川
春
章
筆



風俗東錦

鳥居清長

鳥居清長筆

風俗東錦



多喜川歌麿

多喜川歌麿筆

おはぐろけつ



筆貞國川歌

女むよを文



鳥居清長筆

品川樓遊興之圖



歌川豊國筆

炬燵の美人



歌川豊國筆

夏 姿



多喜川歌筆

多喜川歌筆

多喜川歌筆

多喜川歌筆

湯あがり美人



筆貞國川歌

女くふを汗

319

602

◆泰江堂發行的好評圖書◆

醫學士 林 廣之 著

妊娠胎教よりお産迄

十月月 附産後の食物調理法新しい名前の附方

四六版説明寫眞版入
三百二十頁
定價金一圓五十錢
郵送料八錢

辻 美 津 枝 著

昭和結婚の智識と禮式の心得

附 男女の相性、髪のかき方、帯のかき方

三六版二百三十頁
凸版圖解
定價金八錢
郵送料六錢

男女交際 初婚迄の智識

菊半截版三百頁
定價金四十錢
郵送料四錢

刊 古今浮世繪草紙(第二集) 近々發行)

◎圖書目錄進呈◎

昭和四年四月十日印刷

昭和四年四月十五日發行

定價金五拾錢

郵送料四錢

編者 浮世繪愛好會

發行者 東京市下谷區仲御徒町一ノ六

鈴 木 吉 平

東京市神田區錦町三ノ五

印刷者 太 田 米 吉

東京市神田區錦町三ノ五

印刷所 合名 太 田 印刷所

會社

發賣元 東京市下谷區泰江堂

仲御徒町一丁目六番地

振替東京六〇一六四番

不許複製

終

